Ⅰ	授業の UD 化とつかえる場の意識化（授業改善）
内容	授業の UD 化の共通理解，つかえる場を保障した授業づくり，研究部によるリーダーシップ

1　取組に係る本校児童の実態について

〇全般的には基礎学力が定着している。（学力・学習状況調査や各学年の単元テストの結果などから）
〇生活・学習の両面で，自ら進んで取り組んだり，考え、活用したりする面を苦手としている姿が見られる。（学年度末実施の拡大 NPJ 会議において教職員で共有）
〇特別支援教育や生徒指導上、個別に配慮が必要な児童がおり，個々のニーズに応じた支援体制を必要としている。

2　目的（取組の意義）について

★「重点教育目標」＝「研究主題」として、方向性を明確にする★

目的	①どの児童にとっても「わかる・できる」を実現する	②どの子どもにとっても「つかえる」を実現する	③教員の実践交流を通して，協働的に授業改善を実現する
方向性	授業の UD（ユニバーサルデザイン）化	つかえる（発揮する）場の意識化	個人・学年による意識化

3　内容について

内容	①「授業の UD 化」の共通理解	②「つかえる」場を保障した授業づくり	③研究部によるリーダーシップ
具体	〇どの子どもにとっても安心して学ぶことができる日常の授業改善。 〇UD の考え方を生かした授業改善の視点を教職員間で共通理解を進める。 〇先行研究の活用 〇「やっていたこと」と「やってみたいこと」の再確認	〇子どもが知識をインプット⇔<u>アウトプット</u>できる場の保障。 〇「つかえる」ようになる価値を子どもと共有 〇授業のモデル化 〇「見方・考え方」を軸とした授業づくり	〇目指す方向性を明確に，手立ては多様にという考えを基本とする。 〇学年団を軸としたチームで実践を共有し，振り返り、学び合う。 〇方向性の整理 〇教職員の自主性の保障

4　成果・課題・今後の方向性等

成果	〇どの学年においても，子どもが落ち着いて学んでいる姿が見られている。 〇今までの実践が UD の考え方に関連していることを理解し，自信をもって実践できるようになった。	〇子どもはアウトプットの場があることによって，学習の目標や必要感が生まれやすくなり，その結果，学習意欲の向上につながっている。	〇「つかえる場」の意識化により，「身に付けたい力が発揮されるようなアウトプットの場をどのように位置付けるか？」という問いが生まれ，それが教職員の学び合いにつながっている
	〇目の前の子どもの実態や自身の経験に合った UD 化により無理のない取組となっている。		
課題	〇落ち着いて学んでいる姿と授業の UD 化の因果関係は不明確	〇どこまで具体性をもたせることが資質・能力の明確化となるのか，また，関連して，資質・能力の学習評価に関わる共通理解に困難さが見られる。	〇「身に付けさせたい資質・能力の明確化とその評価」を教職員間で検討することはハードルが高い。
次に向けて	〇「資質・能力の明確化」については子どもと目標が共有できるレベルまで具体化する必要があるのではないか。具体化すること教員の共通理解が促進し，評価の信頼性と妥当性が高まっていく。		